

ぼくができること

柏原中学校 二年 大西 真翔

母からこんな話を聞いた。八月上旬、母が大阪駅で電車を待っていると、向かいのホームに一人の男性がエスカレーターで上がってきたそうだ。白杖をついたその男性はエスカレーターの降り口付近で立ち止まっていたがしばらくすると、乗ってきた上りエスカレーターの方へ進んでいった。母は「え、逆向きなのに」と思ったが、何もできなかったそうだ。男性はどんどんエスカレーターに近づいていく。そのエスカレーターからホームに上がってくる人も数人いたが、声をかける人は誰もいなかった。ぼくもその場にいたら助けられるかなと思いながら話を聞いた。男性がエスカレーターに乗ってしまいそうになったとき、一人の女性がまず声をかけ、続いて二人連れの人々が男性を安全な場所へ連れて行ったそうだ。見て見ぬふりをした人がいた中で声をかけた女性は優しくて勇敢だと思った。母も自分は何もできなかったと言っていたが、ぼくもその光景を思いえがくと助けられない気がした。

母からその話を聞いて、ぼくは柏原駅に行ってみた。目の不自由な人の気持ちや行動を少し考えてみたかったからだ。柏原駅に着くと、まず初めに目をつぶって券売機に行こうとした。しかし、そこまでには点字ブロックも何もなく、どう進めばいいか分からなかった。券売機の前に立ってみると、何円かとか人数の表示は点字があったものの、切符を買おうとしても、最近のものはタッチパネルなので点字がなく、目の不自由な人にとっては何もない画面上を操作しないといけないので大変だと思った。自動販売機はどこに何のジュースがあるのかもわからず、お金を入れるところを探すのにもとても苦労した。券売機も自動販売機も手で操作するのはとても難しかった。目の不自由な人は点字ブロックを歩かないと道がわかりにくい、点字ブロックを歩いても行きたい方へ進むのはとても大変だった。複数の方向に道が続いていることがあるからだ。また、柏原駅ではトイレの前に「止まれ」のしるしがないため、ぼくが体験したとき、トイレの前を通り過ぎてしまった。点字ブロックには、「すすめ」を示す誘導ブロックと、「止まれ」を示す警告ブロックがあり、点々で止まれる仕組みになっているが、トイレの前にはそれがなかったからだ。それは改札の入口も同じで、駅員さんが立っているときはいいけど、駅員さんがいないときがあったので、そのときは切符を切ってもらうのはどうするのかと思った。駅の中でいろいろな体験をして、さらに疑問が生まれた。一つ目は、改札を通ったあと、点字ブロックがあるところをうまく歩けるのだろうかということだ。改札を通ったあとに点字ブロックの上を歩けずにホームから転落したら大変だし、電車が着いてもどう

やって電車に乗るのだろう、と思った。中には補助がついている人もいるし、目の不自由な人が周りの人にたずねて駅を利用しているのかなと思った。

もう一つの疑問は、柏原駅でトイレを通り過ぎてしまった体験から、普段の生活の中でトイレをどのようにしているのだろう、ということだ。トイレだけでなく、お風呂や食事などもどうするか、自分にはわからない。目が不自由な状態でお湯を出したり茶わんを持ったりするのはとても難しいだろうなと思った。その人を介助する人も大変なのだろうなと感じた。

厚労省が五年ごとにおこなう「生活のしづらさなどに関する調査」（平成二十八年調査）によると、視覚障害者は約三十一万人で、人口の0.2%だそうだ。割合だけを見るととても少なく感じるが、母が大阪駅で見た光景のように危険な目にあったり、日々の生活の中で大変な思いをしている人がいるということだ。健常者として多くの人が普通に生活している一方で、安心して普通に生活できない人がいるということがわかった。また、障害がある人に対する差別もある。子どもの場合にはいじめにつながることもある。

ぼくは、母の話や駅での体験を通して、目の不自由な人の大変さや気持ちを少し考えることができた。しかし、本当の大変さや気持ちはわからない。ぼくも含めた周りの人間ができることは、困っている人を見かけたときに声をかけたり手を貸したりすることだと思う。声をかけることはとても勇気が必要でぼくにはできないかもしれないけど、そのことを周りの人に伝えることはできる。自分にできる方法で、困っている人をサポートできるといいなと感じた。